

# サンゴ礁の島の自然を守る・・・ヤップ島の水と緑保全プロジェクト

りそなアジア・オセアニア財団の支援を受けた特定非営利活動法人 [ECOPLUS](#)（代表理事高野孝子 早稲田大学教授）は、2014年春から1年間にわたって、ミクロネシア連邦ヤップ島での自然保護活動に携わりました。

活動はヤップ島タミル地区で活動するタミル自然保護基金 ([Tamil Resources Conservation Trust, TRCT](#)) と連携。前半は、禁漁区の標識の設定、後半は現地での打ち合わせを経てパンフレットやポスターの作成を通じた啓発活動などに取り組みました。

禁漁区は、東西、南北方向にそれぞれ約4キロのL字型をしており、1キロから数百メートルの幅。魚や貝類が豊富なサンゴ礁沿いに設定され、地域住民の貴重な食料源を将来的に安定して維持していくことを目的にしています。禁漁区を示す標識は、縦横約50センチ、厚さ20センチのコンクリートの土台に、長さ3mのプラスチック製の中空の筒を立てた構造。この100kgを越す標識を現場海域に運搬するために、ドラム缶をつなぎ合わせたような巨大な筒を左右に配置したいかだを住民たちが手作りしました。



作業では、このいかだに、重たい標識を積み込み、現場海域にえい航。サンゴが発達した場所ではボートではなく人が泳ぎながらひっぱって、設置場所に移動して、標識を投入しました。8月には来訪した早稲田大学の学生10人らも応援しました。その後10月にかけて計60本を設置しました。



いかだで移動するビデオ <https://youtu.be/pWHrDXSUvIA>  
標識設置作業のビデオ <https://youtu.be/yC1yjKOlqIU>

設置した標識すべての位置をGPSで割り出す作業を行いました。14年12月初旬にヤップ島を襲った猛烈な台風22号（最強時の中心気圧905ヘクトパスカル）によって、ほとんどの標識が横倒しになってしまいました。15年2月末から3月初めに早稲田大学の学生たちが訪問した際に、標識の立て直し作業の応援をしています。

資源保護のためには、島全体の住民への啓発活動が重要なため、資源保護と禁漁区の設定を訴えるポスターやパンフレットを日本で作成し、現地に運び込みました。TRCTのメンバーは、この印刷物などを手に各集落や小学校などを回って、資源保護の重要性を訴える説明会を続けています。



活動は始まったばかりで、密漁も相次いでおり、取締を始めて数件の摘発で漁具の没収と罰金という制裁も課されているものの、特に夜間の監視などが課題となっています。

現地では、地球温暖化にともなう海面上昇の影響からか、沿岸部にあったニッパヤシが枯れる現象が起きています。ニッパヤシは屋根材などに使われる貴重な資源で、種を植える活動も始まっていますが、海面上昇は深刻化して、住まいを内陸部に移す動きも出てきており、今後は心配されます。

